

7月4日(土)、180名が集い、盛大に開催されました。その成果と熱気をここに報告致します。

本フォーラムは、坂口安吾を単なる過去の文学者にとどめず、現代、そして未来へとつなぐ新潟の重要な文化資産として再評価・発信することを目的に開催されました。当日は幅広い世代の参加者が集まり、安吾の精神を多角的に見つめ直す極めて有意義な機会となりました。

第1部の基調講演では、作家の荻野アンナ氏が「安吾は現在も生きている」と題して登壇。『日本文化私観』や『墮落論』などの代表作を現代的視点から明快に読み解き、安吾の思想を「現代を生きたための指針」として提示しました。安吾には「人を良い方向へ動かす力がある。だからこそ新潟市の名誉市民にふさわしい」と力強く訴えられた姿は、参加者に大きな勇気を与えました。

続く第2部の専門家パネルディスカッションでは、「現代における坂口安吾の意義」について深い議論が交わされました。荻野氏は、時代のモラルではなく、自らの価値観を貫いた「日本のヒューマニスト」として安吾を説明。七北数人氏は「固定観念を疑い、自らの感覚を大切にする」「人間主義・実感主義」の視点を示し、森澤真理氏は、「生きよ、堕ちよ」という言葉が示す、自らの人生を生きたる重要性を語りました。三氏の言葉から、安吾の思想が現代社会にこそ必要不可欠であるという共通認識が浮かび上がりました。

さらに討論では、安吾を世界へ発信できる「文化資産」と位置付け、名誉市民の称号や文

学館の再整備、若い世代への継承など、多方面にわたる提案が示されました。最後に篠田昭氏が「坂口安吾の精神に裏打ちされた異議申し立てのできる新潟でありたい」と締めくくり、地域文化を育んでいくことへの期待を述べました。

参加者からも、安吾の魅力再発見の声や文化政策への活用を期待する意見、今後の活動への貴重な提言が多数寄せられ、新潟の未来の文化振興を推し進める確かな一歩となりました。(小山進)



荻野アンナ氏による基調講演

小田原安吾展報告

安吾の作品で好きな物とは問われれば、歴史小説と答えます。そんな私が小田原文学館を訪れたのは5月24日(日)小田原文学館貴重資料特別公開「安吾と画乱洞とその周辺」最終日でした。安吾は三好達治の誘いで昭和15年1月茨城県取手から小田原に転居。居を構えていたのは翌年7月までの1年半でしたが、その間に安吾はさまざまな人物と交流、中でも看板職人山内画乱洞(本名直孝)と親しく付き合ったようです。画乱洞とは我乱洞、我蘭堂などとも表記され「金や財産に縁のないカ

坂口安吾 生誕祭120



環日本海・坂口安吾国際シンポジウム
海を越えて広がる安吾文学の新たな可能性

国境を越える安吾文学の魅力と可能性を、新潟市出身の翻訳家で韓国文学にも詳しい斎藤真理子さんと、芥川賞作家の藤沢周さんの講演によって明らかにします。さらに各国の安吾研究者などによる発表とパネルディスカッションにより、各国での安吾文学の読まれ方、作品を通じての国境を超えた相互理解や国際交流の可能性まで掘り下げます。

日時 10月18日(日)13時～16時30分

第1部／生誕120周年記念講演

斎藤真理子(韓国語翻訳家、著述家)

「翻訳家から見た韓国、日本そして安吾」

藤沢周(作家)

「タンテイ安吾の張り込み術」



撮影・増永彩子
斎藤真理子



藤沢周

第2部／各国代表者による発表&パネルディスカッション

■各国代表者による発表——自国での安吾の読まれ方について

■パネルディスカッション——安吾文学の普遍性と新たな可能性

海外パネリスト／呉珮瑤(こげつよう／中国)、黄益九(ファン・イック／韓国)、アンドレイ・フェュン(ロシア)

ラッポの男」の意味を含んでいたようです。貧しくても自分を頼ってくる人がいればよくなす、展示品の彼の名刺には、貴賤無差別益友一切平等天下御免酒道場西水居山内我乱洞と記載。その人柄に魅かれて、多くの作家や画家がやってきたとの記録、安吾もその一人。安吾は後に小説『真珠』内で「ガランドウ」として登場させています。展示品で目を引いた物は「山内画乱洞日記帳」で安吾との交遊状況も記載された貴重な資料でした。尚、小田原文学館では、令和元年6月に特別展「坂口安吾」ができるまでを催していました。さて、小田原文学館へ行くには小田原駅より徒歩20分。小田原駅東口からバスも出ています。敷地内には本館、からたちの小径を含む庭園、別館白秋童謡館など見どころ満載です。最後に安吾は小田原に引越そうに三好達治からすすめられた切支丹に関する文献を読みあさり、昭和15年7月に初の歴史小説『イノチガケ』を発表、歴史探偵、坂口安吾誕生です。(藤井康夫)

坂口安吾生誕祭120 ミニ展示 安吾と考古学

安吾は、地域史や古墳の被葬者に関心を寄せていました。桐生に移つてのち、作家の南川潤や考古学者の周東隆一らと神社や古墳を訪れています。今回展示する土器は、1952年3月23日に太田市天神山古墳付近で採集したと伝えられているものです。ぜひご覧ください。

場所／まいぶんポート(新潟市文化財センター新潟市西区木場2748-1)
期間／2026年9月1日(火)～11月15日(日)

場所／りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館・能楽堂

定員／200名(先着順・要申し込み)

参加費／無料

お申し込み／①坂口安吾デジタルミュージアムからお申し込み

②①にて申請が難しい方は、新潟市役所コールセンター(025-2434894)へ電話受付期間／9月23日(水)8時～10月14日(水)21時

参加を希望する全員の氏名、代表者の電話番号をお知らせください

問合せ／坂口安吾生誕祭実行委員会事務局(新潟市文化政策課内)

025-2262624

坂口安吾企画展「処方箋文庫®」

坂口安吾の作品世界を「診療」に見立てて体験する展示企画です。

会期／10月16日(金)～10月20日(火)
時間／16日(金)～18日(日)9時30分～19時30分

19日(月)～20日(火)9時30分～17時30分
会場／りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館4Fギャラリィ

入場料／無料 定員／なし 申込／不要
問合せ／坂口安吾生誕祭実行委員会事務局(新潟市文化政策課内)
025-2262624

坂口安吾展 初公開「信長」自筆原稿

会期／①9月1日(火)まで開催中
②9月3日(木)～11月3日(火)

時間／平日9時～17時、土日祝日10時～16時
休館日／月曜日(祝日の場合翌日)、9月8日
～13日・24日、11月4日



編集後記

会場／ほんぽーと(新潟市立中央図書館)2F 特別コレクション室
入場料／無料
問合せ／「安吾風の館」事業室025-222-3062

生誕120年記念 クラウドファンディング

坂口安吾生誕120年の節目を迎えた、2026年に発刊された書籍『新潟県人物小伝 坂口安吾』を一人でも多くの方に届け、安吾を次の世代へ伝えたい。皆さまのご支援をよろしくお願いいたします。

受付期間／2026年9月末まで実施中
目標金額／380万円

申込方法／寄付サイト「コングラント」、シネ・ウィンド窓口

資金の使いみち／

①書籍『新潟県人物小伝 坂口安吾』の出版・普及費用として

②安吾の会の運営・広報のために

『安吾探索ノート』の制作や読書会の運営費、
「安吾風の館」再開のための活動などの費用
問合せ／安吾の会事務局025-2435530



返礼品の一例



スマホでこちらから
ご支援いただけます

坂口安吾新書簡発見 ―『墮落論』発表の年、安吾が一青年に送った手紙―

山本明宛 一九四六年十一月十七日
〔封書 速達 創生社の四百字詰原稿用紙六枚〕
表 和歌山県伊都郡河根村大字河根
山本明様
裏 東京都蒲田区安方町九四 坂口安吾
（消印は21：11：18）

御手紙見ました。
人間を肯定したいといふ君の考へは、よく分ります。そして、君が、人から借り物の考へでなしに、自分の力で、自分の身体で、考へてゐる精一杯の態度に、敬意を払ふものです。

僕も君ぐらゐの時に、そして、二十〔七八〕と書いて消し〕六七の頃まで、人間のすべてをたゞ肯定するところから歩きはじめたことを覚えてゐます。

僕の現在あるやうな思想、つまり墮落論その他、小説も評論も同じものだけれども、その激しさに君がついてこれなかつたら、決してついてくる必要はない。思想に軽率な飛躍は最も禁物です。とことんまで、君の人間肯定をつきつめて行つてくれたまへ。始めから結論を持つてはいけません。たゞ、自分の本当の心を見つめるのです。

君の真剣な問ひに対して、ゆつくり返事を書く暇がないのは本当に残念です。君のやうに、ともかく精一杯、より良く生きようとする少年のために、何を措いても、書いてやりたい責任を感じてゐます。然し、本当に忙しいのです。今、私は、今書いてゐる長篇小説のことで頭が一杯で、どうしても、身を入れて手紙を書く暇がありません。
君は『新潮』だけしか読まないらしいので、

特に君の僕から受け入れたもの是不具であり、補足して書きたい気持が一杯ですが、軽率に補足することは却つていけないことなので、もう暫く、我慢してくれたまへ。多分、来年の三四月頃『中央公論社』から『日本文化私観』といふ僕の評論集がでます。それがでるまで我慢して、そして、それを読んで下さい。それがでたら、君に必ず送つてあげます。君のマヂメな生き方に対する僕の贈り物です。

僕はたゞ、君にお断りしておくが、君に物を教へてあげることが出来るやうな偉い人間ではない。僕自身、何も分つてゐないのだ。僕は暗闇を手探りで歩いてゐる人間です。

たゞ、多少、ひけらかして言へば、僕は僕の生き方に生命を賭けてゐます。君の想像も及ばぬやうな愚行のみしてゐますが、より良く生きたいといふ希ひだけは忘れたことがありません。たゞ、それだけだ。

私は二十七八から『無償の行為』といふことを考へつゝけてゐます。人のため、報酬なく、己れを捧げつくすことが人間の最も偉大な仕事ではないかと、考へ、あこがれてゐます。私は、それはそれが実行できないのです。私は人の為どころか、自分のために、人の犠牲を強要することしかできません。

私の小説では、常に善人を描くつもりで出發して、どうしても、悪人になつてしまふのです。私は悪人は書きたくない。けれども、私は、私自身をいつはることが出来ない。善人を書くつもりで、どうしても、悪い、汚い、醜い魂を書いてしまふのです。

君がもし、本当に人間が肯定したかつたら、ためらひ給ふな、人間を肯定することに精魂をつくしてくれたまへ。

思想は生活でなければなりません。生き方でなければなりません。思想のやうに生きることができなければ、君は君自身を疑らねばなりません。然し、正しいと信じたことは、行はねばなりません。

利己主義はいけなさに極つてゐます。けれども、甘んじて、人にだまされ、踏みつけられ、それでも平気で人のために生きるだけの実際の魂がない以上、先づ、己れに徹することが必要でせう。

私は書きすぎたやうだ。軽率に書いてはいけないから、私はやめます。君のために、ゆつくり返事を書いてあげられないのが、本当に残念だ。

この手紙は、あまり、ムキになつて、読まないやうに。粗雑だから。私は今、本当に、だめなんだ。何も、考へることができないから。仕事のことで頭が一杯だから。許してくれたまへ。

人間を肯定することは良いことだ。もし本当に肯定し得るなら、それ以上、よいことはないのです。常に自己に誠実に、そして、より良く、生きることを、終生の目的とすることです。

あせつてはいけません。私の思想など、反撥し、反抗し、そして蹴破つてくれて結構なのです。私の思想も、然し刻々に変るだらう。なぜなら、私は停止することができないのだから。私は常に、より良くなりたいたし、あるのだから。そして、その結果として、目下は、より悪くなりつゝ、あるやうです。

君のマヂメな、誠実な魂に、私は、最も深い

か判然としない。ちようどこの十一月末に『恋を探して』の第二話『恋をしに行く』を書き終えるが、相前後する時期、『花妖』の連載依頼も来たはずだが、十一月の段階で『今書いてゐる』と言へるのは『恋を探して』しか厳密には当てはまらない。

一九四六年七月初旬、中央公論社から長篇に没頭するならその間の生活費を出すという約束を得るが、その時点ではとりあえず書けるだけの短篇を書く決意を固めていた。

十月下旬になつて、竹村書房の竹村坦や尾崎士郎に宛てて、十一月と十二月の二カ月は長篇に没頭するため、約束の短篇をかたづけろのに大忙しである旨、書き送っている。しかし、ざつと数え上げてみても『風と光と二十の私』と『私は海をだきしめてゐたい』『家康』『母の上京』『戯作者文学論』『模範少年に疑義あり』『ぐうたら戦記』『道鏡』『恋をしに行く』などのほかエッセイも数多くあり、どれだけ徹夜しても十月いっぱいでは書き上げるのは不可能な状況だった。

山本青年宛の本書簡執筆時も、長篇はまだ構想段階であつたと考えられる。

「来年の三四月頃『中央公論社』から『日本文化私観』といふ僕の評論集がでます」とあるのが『墮落論』のことと思われ、当初は『日本文化私観』というタイトルで刊行予定だったことがわかる。神奈川近代文学館の特別展『没後70年 坂口安吾展 あちらこちら命がけにて初公開された中央公論社の栗本和夫・小瀧穆宛安吾書簡』にも『日本文化私観』のタイトルが記されている。その書簡は、エッセイ集の版權を中公から銀座出版社へ移譲させてほしいと嘆願する内容なので、一九四七年四月末ごろ書かれたものと推測できる。

三十年代が盲腸炎から腹膜炎になつて急遽南

友情をいだいてをります。粗雑な手紙から多くの意味を空想せずに、たゞ、友情だけを受取つておいてくれたまへ。今に、本を送つてあげます。

私のやうに、淪落、墮落のドン底をのたうつてゐる魂にとつても『真・善・美』をもとめることが常に変らざる悲願であることだけは疑り給ふな。

昭和二十一年十一月十七日

山本君へ
坂口安吾

解題 七北数人

本書簡は『墮落論』『白痴』が発表された一九四六年に、十八歳の高校生から届いたファンレターに安吾が書き送つた返信である。

原稿用紙は『創生社』と印字されたもの。同社の雑誌『青年文化』に、安吾は『模範少年に疑義あり』（一九四七年一月）と「わが愛読の書 二」、青年に読ませたい本（『業書回答』）（一九四七年三月）を寄稿している。本書簡執筆時は『模範少年に疑義あり』が創生社に渡される前後であり、もらつた原稿用紙の余りを使つたものだらう。

一九四六年十一月半ば頃、大阪の天王寺商業高校三年生だった山本明青年は、当時、実家の商家を継ぐか、自分の夢であるドイツ言語学の探求に向かうか、人生の岐路に立つていたという。いかに生きべきか人生の方向性に指針を得たいと思い、大ファンだった作家坂口安吾に宛てて手紙を書いた（住所が和歌山県になっていたのは、この頃、明の父親が死去したため、母親の実家に身を寄せていたためではないかと遺族はいふ）。

つに保管した。高校卒業後はいったん旧大阪商科大学へ進むが一年ほどで中退し、安吾の助言に沿うように、新たに東京大学独文科へ入学し直し、一九五一年に卒業後はドイツ語学者の道を歩むことになった。一九六五年に東京大学教養学部助教授、のち教授、名誉教授となり、二〇一五年、八十八歳で逝去した。編著書に『現代独和辞典』『現代和独辞典』（三修社）、『ドイツ語入門 教室と自修のための』（同人社）などがある。

『国文学』一九七九年十二月号などに安吾論を発表している社会学者の山本明（一九三二―一九）とは別人である。

本書簡は山本明氏の遺族から松之山安吾の会に寄贈され、二〇二五年九月十三日『新潟日報』と『桐生タイムス』に発見の記事が掲載されたほか、ニュースサイト『十日町タウン情報』にも写真や詳しい発見の経緯が掲載された。二〇二六年春から十日町市の大棟山美術博物館（坂口安吾記念館）にて公開展示されている。